

宮代町立小中学校の適正配置及び通学区域の編成等に関する審議会の  
第2回会議録

1 日時・場所

令和元年9月19日(木) 19:00~21:05

役場庁舎 202会議室

2 出席者

審議会委員：16名出席

濱本会長、佐藤副会長、池田委員、大和田委員、上野委員、矢戸委員、金子委員、小澤委員、山内委員、鶴見委員、山口委員、小林委員、戸田委員、松本委員、宍戸委員、菊地委員

事務局：中村教育長

教育推進課：渋谷課長、大場副課長、加藤主査、三反崎主事

3 開会

4 挨拶

教育長及び濱本会長から挨拶

5 検討事項

現行計画等の検証に関する今回のテーマ「小中学校の適正規模について」資料に基づき、事務局から説明後、意見交換を行った。

濱本会長：本日のテーマは、現行の計画等の考え方の基礎となる学校の適正規模が、12学級から18学級で運営していくとの考え方について検証していくということです。事務局からはこれまでの経緯等について資料に基づき説明がありました。

最初に、学校現場の立場から山口委員いかがでしょうか。

山口委員：学校規模として12~18学級という考え方がありますが、学校長として考えるとこの学級数というのは望ましいところがあるなと考えているところがあります。12以上になると学年の学級数が2以上になります。そうすると学年間の教員同士で知恵を出しながら、子供たちの教育の質の向上に結びつくというところがあると考えています。また児童数が多くなることで子供同士の結びつきや、学校行事等が活発になります。

ところで、百間小学校は、今後児童数が減少していくことが考えられますので、今年はそれに対応するために、運動会においても、これまでは各学年で取り組んでいたところですが、低学年、中学年、高学年というくくりで、ある程度人数を確保しながら、子供たちが多様な交流の中で運動会に参加できるよう工夫しました。

百間小学校の児童たちは、百間小学校が大好きです。地域の皆さまも百間小に愛着を持っていただいているということを学校長として感じています。ここも学校を運営していくうえでは、大切です。それを日々感じながら教育に携わっていきたくと考えています。

菊地委員：前回は歴史的な面から話をさせていただきました。学校規模について、今後の運営のための理想的な学級数を検討するということだと思いましたが、小学校と中学校で事情は異なる面もあるのかなと思っています。

資料では、教職員の配当基準があります。学校経営として必要な人数という面もありますが、埼玉県の予算的な裏づけで、これくらいの子どもだと、これくらいの補助金がつくとか、そういうことなのでしょうか。

濱本会長：教職員の配当基準ですが、国が示している基本的な考え方があり、それを基にして、県の予算等もかんがみて、学級数に応じて教職員の配置を決めるものです。学校の状況に応じて「加配」というものもありますが、基本的には、この配当基準に基づき先生を配置することになります。

菊地委員：教職員の配置人数については、そういうことで制約があるということですね。

資料にある、文科省の適正配置に関する手引きは、非常に良くできていると思いました。これを読むと学校の統合については、市町村に任されています。統合しない場合の方策も、記載されています。これと小規模校の予算との関係は良く分からないのですが、これを見ていくと小規模校の様々な取組が紹介されています。小中一貫教育、保育園や幼稚園、図書館など他の施設との連携、教職員の交流などデメリットを取り除くような柔軟な方策が明記されています。そういうことを考えると主要5科目については、専任の配置が必要だとは思いますが、他の教科については、学校の兼務を考えることもできるのではないかと思います。

それと資料の推計をみると、須賀中については、令和8年度くらいまで150人程度で、その後減少していく推計ですが、(中学校1年生は)39人になると2クラスということだと、当面は複数学級になっていくと思います。

宮代町の今後の10年くらいを考えると、このまま人口が減っていくのか、それとも少しその傾向が変わっていくのかということも分かりませんので、今すぐ考えないといけないのはどうなのかなと思っています。

濱本会長：基本的には12～18学級ということで、今後、この手引きを踏まえて考えていくべきという意見でよろしいのでしょうか。

菊地委員：いや。数を決めてしまうというのはどうなのかなと思っています。中学校だとどうなりますか。

金子委員：12学級だとすると、1学年4学級ということになると思います。学校教育法施行規則上、12学級以上18学級以下が標準とされています。

それに加え、今後の状況やアンケート結果、学校運営等を勘案すると、12から18学級とすることで、子どもたちに良質な学校教育環境を施せるのではないかと、ということでこの規模が出されていると認識しています。そしてこの認識は間違いではないと思っています。

濱本会長：金子委員のおっしゃるとおり、前回の答申もそれを踏まえて出されたものであると思いま

す。

菊地委員：それが正しいかどうかというと、様々な状況も考えていく必要があると思います。それで進めるというのは、性急すぎる気がします。例えば、部活の数も、生徒数の減少が部活動の数の減少の主な要因だろうということは推測できますが、それだけが原因なのか、という気もしています。因果関係として、もう少し確認していく必要があると思います。学校の生徒数が増えれば、部活動の数が増えるかどうかという点は分からないと思います。例えば、50年くらい前はサッカー一部はなかったと思います。Jリーグができてサッカーが盛んになっていったんだと思います。また、サッカー少年団や野球もリトルリーグもありますので、他のファクターが出てきて、部活動が減ったということもあると思います。単純に人数が多ければ様々なことができるとはいえないと思います。もちろん主なファクターであることは間違いないと思いますが。

小澤委員：自治会の代表として参加していて、教育のことは門外漢ですが、今回の検討事項として12学級から18学級は、これまでの経験上得られた数字かなと思っています。これを半分にすればもっといい教育効果が出ますよとか、もっと大規模にしたらいいですよというイメージはないと思っています。これは、これまでの積み上げだと思っていますので、この数値を基準に考えていくことが必要だと思っています。

小林委員：この数字は決まっているわけではないと思います。一つのたたき台だろうと思います。この審議会で、この数字はどうなのかということになれば、この数字にこだわらないだろうし、12～18ではなく、20学級くらいでも良いのではないかということになれば、そういう結論が出るかもしれないと思っています。したがって、あくまでたたき台だと認識していますし、そういう認識でいいと思います。

話は少し変わりますが、先ほども意見がありましたように、この手引きはよくできていると思います。メリット・デメリットが記載されています。ただ、このメリット・デメリットを議論し始めると、数が多いですから、たいへんだと思います。たくさんあるメリット・デメリットの中で、何に重きをなすか、ということを考えていくことが必要だと思っています。私としては、ポイントとしては2つだろうと思っています。一つは安全の確保だと思っています。学校を再編した場合、安全がどう確保されるかどうか、特に小学校はそうだと思います。もう一つは学力です。教育はいろいろな側面がありますが、特に中学校では、子どもたちの学力の向上に寄与できるかどうか、その部分に私なら重きをなします。さらにもう一つ言わせていただきますと、メリット・デメリットを読みましたが、極端なことを言うと、小規模校でできることは大規模校でもできます。きめ細かい指導だとか、個を生かした指導等といったものは指導の方法の問題だからです。ところが、大規模校でできることは、小規模校ではできません。例えば、部活動を増やすことなどです。その部分を踏まえながら考える必要があると思います。また先ほど、山口委員が発言しましたが、地域性の問題が出てきます。学校というのは地域の文化センターですから、それを払拭できるだけの構えができるかどうか、を考えていくことが必要になるだろうと思っています。

濱本会長：何名かの委員の意見としては、基本的には12学級から18学級という方向でいいが、中身も重要という話がありました。

戸田委員：私には小学校2年生の子どもがいます。これからどうなっていくのかなと思い、資料を確認しました。現状みても、部活が減っているとか、1学級の小学校では、学年に先生一人になってしまいます。例えば、児童生徒の中でいじめのようなものがあつたとき、クラスが1学級だとしたら、逃げ場もない状況になります。また私も中学校に通っていたとき、部活はとても楽しかったです。これがずいぶんなくなったなと思います。そういうことを考えれば、適正規模の12～18学級にするという方向性は評価できていると思います。

菊地委員：学級数を前提として学校を運営していくという考え方で大丈夫なのかなという気がしています。というのは、学級数の関係から、宮代町の中学校を一つにしていくという考え方になるわけで、そこに直結しているんですね。

濱本会長：今回の議論は、学級数という観点になっています。

金子委員：学級数の議論は、答申の考え方の検証となりますが、今後町の計画等の検証を行う中で、学校数についても検討していくことになると思います。

濱本会長：まず、前提となる考え（学級数12～18学級）はどうかという点について考えたいと思います。

金子委員：小学校3校、中学校は1校というのが町の計画として位置づけられています。これは事実として、計画に位置づけられています。

菊地委員：学校数の問題に直結している話だと思います。

大場副課長：町の計画に学校数が出ているので、そこを全く排除して議論するのは難しいという意見は分かります。発言する際にも、学校数というものが頭の片隅にあるという点もあるとは思いますが、順序としては、まず、宮代町として目指すべき学校規模としての学級数という観点から議論したいというのが、今回のテーマです。学校数については、町の計画等に定められていますので、今後の議論のテーマになると思います。ただ、現時点では、12～18の標準規模についての考え方について、これまでの経緯も含めて踏まえて評価していただきと思います。

松本委員：手引きをみればメリット・デメリットはあるのは理解できます。その中で小規模校を存続させるという観点は、離島や山間部などを視野に入れている配慮なのだろうと思います。そういう中で宮代町を考えたとき、東京を控えている中で、宮代町の子どもたちは、そこと競い合っていかなければならないわけです。そういう位置に住んでいる中であつては、12～18学級を確保するというのは重要で、いわば、都会のはずれの地域である宮代町としては、これを維持していかなければならないと思います。また、児童と生徒の通学時間、通学距離についても、3つの小学校、1つの中学校でフォローできそうだという考えのものと現行の計画だと思いますので、基本的には、私は、今の方向性で賛成していきたいと思っています。

宮代町が一つの自治体として学校教育を進めていくという前提の中で考えていくのであれ

ば、私自身、他の自治体から宮代に来たということもありますが、百間地区と須賀地区という地域・地区からの視点よりも、宮代町として将来のことを考えていく必要があると思っています。

小澤委員：私自身は百間中の出身です。住んでいるのは、須賀と百間の境になります。私は東小から百間中に行きました。中学校では、百間小の児童さんも一緒になるので、中学校からは一緒に学びました。ただ、須賀小の方とは疎遠になってしまいました。でも今は自治会長をやっているので、須賀地域の皆さんとの付き合いが多くなりました。いろいろ議論もあると思いますが、中学校は1校でもいいのではないかと思います。宮代町は南北に長いこともあり、最初は2校のほうがいいとも思いましたが、中学生は通学については何とかかなと思います。1校にするメリットは、学校規模や学力向上の問題もありますし、私は、自治会長として思うのは、コミュニケーションの事です。私の経験ですが、中学校で東小と百間小と一緒に百間中に通うことになって、そこで人間関係が築けましたから、今でも百間小の人たちとはコミュニケーションが取れます。そう考えると中学校が1校になった場合、宮代町全体のコミュニケーションという観点では、有効だろうと思っています。学校再編は、児童生徒の将来に渡ってのテーマですが、長い目でみれば、そして宮代町全体を考えれば1校という考えもあると思います。そしてそれは、宮代町にとっても大きな財産になるのではないかと思います。

宍戸委員：先ほど小林委員がおっしゃったように安全というのがとても大切だと思います。今でさえ学校になかなか行きたがらないというか、そういう感じなので、学校が遠くなると、通ってくれるのかなという不安があります。安全というのは、親が心配することなのですが、子どもたちがいくら遠くても行きたいという学校であれば、遠くてもいいのかなと思います。行きたくないという子どもたちをすごく遠くの学校に通学させるのは大変だと思います。私からみると、今通学班で朝歩いている子どもたちもみても、あんまり楽しそうに見えないと思っています。

戸田委員：私は、毎日通学路で子どもたちを見ていますが、楽しそうだと思います。

金子委員：東小の近くに住んでいて、笠原小に楽しそうに通学する子どももいます。

宍戸委員：何か特徴の持った教育のできる学校にして、学校が楽しいというようになればいいと思います。例えば、体験学習をもっと充実させるとか、地域の方に学校教育に参加していただくとか、もちろん実施しているとは思いますが、NG事項が多すぎるかなと思います。また学校が忙しすぎるのかなと思います。それについていける子もいれば、ついていけない子もいて、以前は何も考えずに通えていた気がしますが、今はがんばらないと学校に行くのが本当にたいへんな気がします。そのうえに距離が遠くなると、本当に行きたくないという子どもが増えちゃうという心配もあります。安全の面もそうなのですが、モチベーションも考えていくことが必要かなと思います。久喜市や春日部市の境から自転車で来いというのも酷な気がして、東武動物公園駅を利用して通えるような位置に中学校を作るとかを考えてもいいと思います。どこかを存続させるという考え方ではなくて、通学を考え、

電車で通える可能性がある場所というのをこの審議会でも考えていくという視点も必要か  
と思います。

濱本会長：この審議会では、そういうことも提案できるのでしょうか。

大場副課長：実現できるかどうかという点は別として、また諮問と直接関係あるかどうかという点は  
別として、審議会として、今回の諮問事項に付随する提案があればそれは受け止めてい  
く必要はあると考えています。

小澤委員：中学校1校を考えたとき、課題としては、宮代町が南北に長いということだと思  
います。通学距離の問題もありますので、保護者からすれば、問題点だと思います。ただ、教育的  
な効果を上げていくのであれば、ある程度の規模を持ったほうが、お子さんのためになる  
のではないかと思います。そのうえで、通学時間はどうなのかというのは検討が必要だと思  
います。

松本委員：それについては、現行計画等では、小学生なら何キロとか中学生なら自転車通学が  
できるので、幅は広がっていると思います。私は、12～18の規模でやったほうがいいと思  
っています。部活のこともあります。学力的にもそうだろうし、人間関係の構築の観点で  
もそうだろうと思っています。

なお、通学時間等の関係については、現行計画等の中でもクリアになっていると認識して  
います。

小澤委員：私の隣の方は、須賀小に行きました。通学距離が遠かったようで、往復で疲れて勉強な  
んでできなかった、という話をしていました。やはり通学というのは、時間も含めて負担に  
なると思う。安全面も含めて、考えていくべき事項だと思います。

濱本会長：学校数の話もでていますが、まずは12～18学級という観点から議論していきたいと思  
います。

菊地委員：理想を目指すために学級数を検討するというのは分かります。ただ、その結果が中学校を  
1校にするという結論に直結します。そうすると安全面だとか、歴史的な経緯も考えてい  
くことが必要だと思います。須賀地区は、御成街道沿いに集落ができて、それから新田開  
発があり、それで集落が発達し、和戸駅ができたという経緯があります。その後ほとんど  
発展していませんが、そういう歴史的な経緯、地域的なまとまりも考慮すべきだと思  
います。手引きは、中山間部の関係もあるとは思いますが、首都圏の40キロ圏のところ  
で駅が3つあって統合の話が出てくるというのは普通はないんじゃないかなと思います。

金子委員：それは普通にあると思います。春日部市でも中学校が統合しています。40キロ圏だから  
統合はないというはないと思います。

菊地委員：宮代町として1校とするというのは、いろいろな事情を無視していると思う。私も4キロ  
くらい通ったことがあります。これは、中学生でも厳しいと思います。バスにすればいい  
のではないかと、ということもあるかもしれませんが、交通事情も昔とは異なるということ  
も考える必要があると思います。

濱本会長：どうも議論が中学校を1校にする前提の話になってしまいますね。数の話は今後のテーマ

になるのですよね。

渋谷課長：階段をイメージしていただきたいのですが、階段を登っていったときに、学校の数についても検証する機会が必要だと思っています。ただ今回は、12～18学級について議論をお願いしたいと思います。

菊地委員：理想としては、多い方がいいだろうってのはあると思いますが、子どもの気持ちとしてはどうかという点もあると思います。子どもにアンケートは取れないのでしょうか。なかなか難しいかな。

（子どもたちへのアンケートの実施は、難しいのではないかという声あり）

小澤委員：小学生は中学生の経験はしていないですし、未就学児は小学校を知らないわけですから、その部分は我々大人が考えていくべきなのかなと思います。

菊地委員：いじめの問題や進学についてはどうなのか、とか、いろいろあると思います。私も8クラスの中学校でしたが、2クラスの中学校とはカルチャーが違いますよね。

小澤委員：大規模校がいいか、小規模校がいいかという議論ではなく、適正規模という観点で考える必要があります。あえて宮代町が小規模校を選ぶんだという理由でもあれば、それは選択もありうると思いますが、それを選ぶ理由があるのかな、と思います。

小規模校は、それを選択せざるを得ない状況にある学校については、手引きに対処すべき内容がありますが、そうでない可能性がある中で、それをあえて小規模校を選択するというのは、どうなのでしょう。

大場副課長：今の答申が12～18学級になっていて、審議会の委員の視点から、評価していただきたいと思っています。学校の数については、頭の片隅に入ってきてしまうと思いますが、まず、根幹となる規模ってどこなのかという点を決める必要があるということで、今回の論点を設定しました。12～18という数字以外を排除しているわけではなく、先ほど12～18はたたき台という話もありましたが、この議論の中で、別の規模という話になれば、それは今回検証を行った結果になると思っています。

金子委員：規模については、標準規模はこうですねという話になると思います。ある程度信用のおける推計値を考えると、これから外れた規模を選ぶというのは、特殊な理由がないと選びづらい話だと思います。私たちが子どもの頃に味わったクラス替えがあって、様々な人たちと関わって、それなりに楽しかったという学校生活での思いを今の子どもたちも同様に味わってほしいと思ったときに、ここから外れてあえて小規模校を選ぶかなと思います。

戸田委員：小規模の学校同士で、モニターみながら授業しているような状況は、私としては考えられないと思います。

金子委員：現在の学校施設で対応できる学級数はどうなっていますか。例えば、須賀中や百間中は、何クラスまで編成できるのかということです。

小林委員：百間中は6クラスくらいまでならできると思います。

大場副課長：児童生徒数が少なくなっていく中で、普通教室を別の用途で使っているケースが多いのですが、通常、どの程度の学級編成が可能というのは、次回までに調べます。

上野委員：今私は中学校でPTA会長をしています。PTAとして子どもたちに触れ合う機会は多いかなと思っています。実際の数値で中学校の学級数は、(特別支援学級を除いて)須賀中が6学級、百間中が9学級、前原中が6学級となっています。これから減る可能性がある学校、増える可能性がある学校があると思いますが、生徒数であまりにも差が開いてしまうと、学校の格差のようになってしまいます。それこそ生徒数が多い学校は、部活などでいろいろとやることができると思います。部活が減ることなくなるでしょうし、生徒数が増えると、部活が増えるかもしれません。一方で、生徒数が減っていく学校は、さらに部活がなくなっていく、授業をする先生も減ってしまうということが考えられます。現に小学校は、音楽の先生が家庭科を教えているというケースもあります。

私は前原中の出身ですが、私がいたときは、演劇部がありました。でも今は演劇部の部室は、PTA会議室に変わっていました。標準規模については、数値のことも大切だと思いますし、町のこれまでの背景も大切だと思いますが、一番大切なのは、そこに通う子どもたちのことだと思います。今の子どもたちは相当我慢していると思います。部活ができなくて、友達と離れて別の学校に行かなければならないという声も私たちは聞いていますので、そういったところも考えていただければありがたいと思います。

矢戸委員：12学級から18学級についてですが、長男が学校に通っていたときは、百間小でも1年生から6年生まで3学級ありました。そのときからスポーツ少年団に関わっていて、4つから2つになったのですが、2つでも合わせると80人以上の児童が野球をやっていました。それがつい5年位前の話です。

子どもが今中学2年生ですが、小学校から中学校まで、ほぼ同じメンバーがそのまま学年があがっていくので、いうなれば8年間、人間関係が固定化されてしまっています。子どもに聞いてみると、そういう生徒も多いと言っています。かといって学校はつまらないわけじゃないから、学校には通って、部活動もしていますが、そういう子どもたちが事実として増えているというのがあると思います。

私も、スポーツ少年団で、子ども達と一緒に野球をしてきましたが、子どもが減っていることを実感しています。以前なら中学校で野球部がなくなるなんて、考えられないことだと思います。その現状が、残念ですが、今の宮代町を物語っていると思います。子を育てている親の考え方としては、現状はあまりにも少なすぎると思います。やはり12学級から18学級というのは望ましいと思います。

大和田委員：高校生になる子どもいます。中学に入学したとき、科学部があり、入りました。しかし、1年生で入ったばかりの1学期に、当時の校長先生に、科学部は廃部になりますといわれました。とてもショックでした。それでも3年間がんばり、実験で県大会にも出ました。最後は2人だけの科学部でしたが。ただ、今思うと、入ってがんばろうと思っていたときに、廃部の話がすぐ出たのはかわいそうでした。

2番目の子どもはサッカー部に入りました。部員は9人だったと思います。9人でもこのチームでやりたいということで、他校との合併の話もありましたが、9人の部員のまま活



動を続けました。その後、活動が縮小したのだと思いますが、現在のサッカー一部は、他校と合同チームになっていると思います。平日は、学校で練習していますが、土日は、他校と合同で練習しており、やはりそれはそれで心配な面はあると思います。いずれにしても練習できる最低の数というのがあってと思いますので、このまま人数が減っていけば、いずれそれができなくなるかなという心配もあります。

一番下の子どもは、卓球部に入っています。卓球部は今のところ大丈夫ですが、今後どうなっていくのかなと思ってはいます。

濱本会長：だんだんと子ども達が減っているってことですね。

大和田委員：そうです。それを感じています。

池田委員：私は、子どもが小学生でPTAとして関わっています。今部活の話が出ましたが、中学校に進学したときに、自分が好きなものを選べないという状態なのは、子どもたちにとってとても悲しいことだなと思います。宮代町に住んでいても、バトミントンがないから杉戸に通っていますという人もいる中で、地元の小学校に行って、中学校に行って、地元の人と関わりながら成長していくほうが、宮代町にとっても良いのではないかなと思いつつ、部活の数が少ないから別に流れていくのは、良くないと思います。そういうことを考えると、中学校は1校でもいいのかなと思っています。教育の面で考えてもいいのかなと思います。須賀小は須賀中、百間小は前原中、という決まった枠組みの中で、そのまま中学校に進学していく状況になります。その世界でしか、自分が発揮できないので、その9年間もったいないような気がします。どこかで他の人と関わることで、その子にとっての価値観や人生観が変わる機会があると良いよねという話も耳にしたので、そういうことを考えると、中学校に関しては、12～18学級がベストなのではないかなと思います。

菊地委員：学級数を決めるということは、学校数に直結しているということだと思います。

濱本会長：それは、次の議論になると思います。まずは、集団の多い中での教育が子どもたちにとって良いという意見をいただいたということになると思います。

菊地委員：直結していくことになるので、今の生徒にアンケートをとるとか、住民投票とは言わないですけど、宮代町の住民の意向を確認するというのもあると思います。あるいは須賀地区の人に聞いてみるとか。アンケートは実施したようですが、私もそれについては知らなかったんですけど。

松本委員：ここでは皆さんの意見を広く言う場であって、アンケートや住民投票などという話は、ちょっとどうかなと思いますが。

菊地委員：現状を変えていくということになれば、より積極的な理由が必要で、他の方法がないなどのことを確認する必要があると思います。どうしてもそれを避けることができなければ、地区の変更などもあると思っています。義務教育学校のこととか。そうすれば、部活動のこともいろんな方策があるかもしれないです。この手引きについても、過疎地域のことだけでなく、地域の特別な事情を考慮して、との趣旨も書かれています。

濱本委員：基本的な経緯等について、事務局が説明していると思います。

金子委員：アンケートについては、既に行っていると思います。

菊地委員：全員じゃないでしょ。

大場副課長：保護者と教職員全員です。

菊地委員：住民全員じゃないですよ。

金子委員：全ての住民に聞く必要があるのでしょうか。既にステークホルダー（保護者や教職員）に取っているわけです。

菊地委員：私の考え方では、歴史的な地域のまとまりの中に、今の小学校、中学校があると思っています。

矢戸委員：実際に自分の子どもは学校に通っています。歴史のことを言われましても。

濱本会長：審議会ですから、そこで方向性を議論して答申するということであり、答申を踏まえてどうするかは、宮代町が考えていくことになります。

小澤委員：地域では、今まで学校があったのになくなったたりすればさびしい思いはすると思いますが、それ以上に児童生徒のことを考えることが必要だと思います。別の手当てで、そういう思いは解消してもらう必要があると思います。まずは、児童生徒にとって何がいいのか、その視点が重要だと思います。

アンケートをあまり学校とかかわりのない方にとってどうするのかという気はします。自治会活動でも高齢者が増えていますが、まずはお孫さんのことを考えてほしいと、説明するつもりです。

山内委員：私も自治会の代表ですが、子どもも大きいので、学校から離れている状況です。でも現場の声として、子どもたちが少ないということや、部活動も厳しいというのであれば、この12～18学級というのは、適正なのかなと思います。

学校というのは、避難場所にもなっているので、そういう面も考えてほしいと思います。自治会活動では高齢者も多いので、何かあったときに、学校を活用できるようにしてほしいと思います。

鶴見委員：私も、文科省の手引きを読んで、メリット・デメリットが書いてあってとてもいいものだと思います。これを読んで結構気づかされることも多かったです。

そのうえで、私としては、中学校を1校というのは反対です。部活の問題、学力の向上の問題などいろいろあると思いますが。

部活は、できない部活があるとか、サッカーや野球がなくなるということもあると思いますが、子どもが少ないことだけが原因ではないと思います。将来を見据えてプロにさせたなんてことを考えると、中学校の部活動じゃ厳しいと考えている保護者の方もいると思います。私としては、子どもの数が少ないから部活が成り立たないという考えはしていません。

学力の向上の件ですが、子どもが少ないからなかなか学力の向上につながらないといいますが、全国模試などを取り入れるとか、ある高校では塾の先生を入れて成績を向上させたという例もあると聞いています。そういうやり方などもいろいろとあると思います。一

つにするということをしるがすぐに考えないで、小規模でもやっていけるということも考えてほしいと思います。

また手引きをみると、遠くなる場合は、越境入学みたいなものもできると書かれています。安全面が不安なまま、通学させることはないと思っています。

小林委員：学力の話が出たので、発言させていただきます。学力の基礎は教員だと思っています。教員の質の向上なくして学力の向上はありえないと思っています。今回の事務局資料の3ページに、教科の数に教員の数×2となっています。この×2がとても重要な意味を持っています。ここが一人だった場合、その先生が自分で全部考えないといけない。もちろん研修の機会もありますし、若くて力のある先生もいますが、初めて教員になって教科を教える中で、さあどうしましょうということになります。そのときに2人いれば、意見交換したり、ベテランの先生が配置されていれば、相談できます。複数の教員がいるというのは、教員の指導力の向上に非常に寄与します。特に中学校の場合は、きわめて重要だと思っています。小学校においても、新任の先生がある学年を一人で持たなければいけないというのは、たいへんだと思います。日々毎日対応している中で、困ること、どうしようというときに、なかなか適切に対応はできないと思います。そういう意味で、ある程度の学校規模がないと、教員の養成が図れないと思います。私自身学力の向上にこだわっていますので、発言しました。

鶴見委員：私は、それは学校単位で考えないで、町の教員全体で考えていくべきだと思います。宮代町全体で、コミュニケーションを取るとするか、勉強会を開くとか、やり方はわかりませんが、そういうことをして育てるのは無理なのではないでしょうか。

小林委員：一人だけしかいない場合、研修する時間の確保が難しい面があります。もちろん、夏休みなどで研修機会はありますが。例えば、今日のこの授業のこの部分をどうやって教えればいいのか、ということ電話かけて聞くとか、先生来て下さいってわけにはいかないと思います。複数いれば、その日の夕方に聞くこともできます。町全体で指導すればという話ですが、理想的にはありますが、学校現場の中では、実際にはその場その場の相談が重要ですので、なかなか難しいかなと思います。

金子委員：中学校の教員の残業時間は、月約80時間とも言われており、その状況下で、そういうことをすれば、さらに過重労働になると思いますので、難しい面があると思います。

濱本会長：そうした点などありますが、宮代の子どもたちが楽しく学校に行き、楽しく帰ってくるというのが原点です。そこを大切にすることで進めていきたいと思っています。

菊地委員：先生が二人ならできて、一人ならできないという話はおかしくないですか。蓋然性としてはあるかもしれませんが、宮代町の教育委員会としては、優秀な人をどうリクルートするかということではないのでしょうか。私が小学校のときにも優秀な先生はいました。それが二人ならできるのかなと思います。

濱本会長：それは先生の指導力の話ですので。

菊地委員：学級数を決めるということになると、多い方がいいということになると思います。それが

地域としての学校として1校になるというのはどうかなと思います。

金子委員：個別の議論ではなく、標準的な考えを先ほど話して下さったと思いますけど。

濱本会長：先ほど事務局からも話がありましたが、まずは、適正規模は、このくらいの規模があったほうが良いよねということをご皆さんで共通理解するというのが今日のテーマだと思います。

菊地委員：文科省の手引きをみても、地域としての特性があるし、まとまりとかをどう考えるかということとは地域の判断だと思います。

金子委員：地域の特性とも関連しますが、アンケートを取った結果として、規模としてはこれくらいが望ましいという要望が出ているんだと思います。これはいわば地域の声でもあると思います。

佐藤副会長：適正規模としてどの程度がいいかという観点から考えると、私としても12～18学級というのは妥当だと思っています。国の手引きをみても、環境上どうしても小規模で運営していかなければならないところもあるんだと思うのですが、宮代町として断然、小規模校を選択するメリットがあるのであれば、自分の子どもは小規模校に入れたいと思います。しかし、現状としては、クラス替えもできて、部活動も選べてというほうが良いと思います。それができないところには子どもを進学させたいという気持ちにはなりません。そう考えると、宮代町として12～18学級の規模というのは適正だと思っています。それが中学校1校か2校というのは、現時点では別で考えていくことだと思います。また、もし、大規模化して、安全面が守れないなどということになれば、それはそれで別の話になると思います。いずれにしても、子ども達の視点で考え、子ども達が多く先生に出会える機会、多くの友達との出会いなども考えると、ある程度の規模が必要なのではないかと思います。

菊地委員：最低2学級という観点から考えて各校の将来の推計を見ると、今後7、8年は、2学級は確保されると思います。

佐藤委員：先ほどもお話しをいただきましたが、大規模校だったら小規模校でやっているようなこともできると思います。でも、小規模校で大規模校のようなことをしようとしたら、それは当然できないんだろうと思います。1校かどうかは置いておいて、中学校は、ある程度の規模が適正ではないかと思っています。

菊地委員：理想はそうかもしれませんが、デメリットもあると思います。東武動物公園駅近くに和戸の北側のほうの人が通学するかということ、バスを使っても考えられないと思います。

濱本会長：今日は、12～18学級の規模がいいかどうかという観点で話し合っています。それを今後も検討していくのであれば、次回もこの検討を進めていくというのが一つ。もう一つは、審議会として、学校規模については、12～18学級でいよいよとの共通認識を図り、次のテーマに向けて検討を進めていく。このどちらかになります。皆さん、その辺はどうしましょうか。

菊地委員：学級数と学校数は、直結しているわけです。理想的な学級数を出すのが審議会の目的なのですか。

大場副課長：今後の議論を進めるに当たっては、学校の適正規模として、どの程度の規模が必要かと

いうことをまず検証していただくことが必要だと思っています。もちろん実際に次の議論を考えるに当たっては様々な課題も出てくると思います。ただ、根幹となる部分を共有化しておかないといけないと思います。適正規模を考える前に、それを考えると、こうなってしまうから、12～18学級はダメだということではないのかなと思います。

金子委員：今日の議論のテーマとしては、前回の答申で示された適正規模に関する考え方については、どうなんでしょうか？というのを問いかけているんだと思います。それを踏まえて、本日、審議会として、議論を行い、会長が、考え方はこれでいいですか、ということをお皆さんに投げかけました。これまでの議論を踏まえると大多数は、12～18学級としていく適正規模については、共通認識が図られていたと思います。それからその次は、それを踏まえて、学校の具体的な配置はどうしますか、とか、次に、交通をどうしますか、という話が出てくるのではないかと思います。

私の理解としては、そのために、ベースとなる考え方、すなわち学校規模について審議会として共有化する必要があるということだと思っています。各論にいくよりも、まずベースラインを決めて着実に進めていくということなんだと思いますが。

濱本会長：そのとおりです。

菊地委員：現実を考えてどうするか。

松本委員：現時点でそこにこだわると、話が進まないと思います。

濱本会長：では、この議論を何回やればいいですか。

菊地委員：私は、7、8年は、このままで須賀地区についてはいけると思います。そしてその後の様子を見てどうなっていくのかを考えたほうがいいと思います。

理想の学級数を出すというのは、何校なのかにかに決めるための前提なんではないですか。

大場副課長：何校かというのは最終的には答えとして出てくるかもしれませんが、一方で課題も出てくると思います。12～18という方向性がこの審議会で確認されても、それを実際に適正配置する際に、学校の数を決める際に、課題も出てくると思います。その課題は、課題として考えていかなければならないと思いますが、まずは、先ほど意見がありましたとおり、まずはベースラインとなる考え方を確認しないと次に進めないと思います。前回の答申でもここがベースになっています。

菊地委員：ベースラインを決めた瞬間に、あとの結論は出てしまうんじゃないでしょうか。

大場副課長：そこを狙って今回のテーマにしているわけではありません。

金子委員：ベースとなる考え方を確認するということだと思っています。諮問書を読むと、前回の答申の検証というよりも、町として策定した基本方針と適正配置計画を検証してくださいという内容なのですが、そのベースとなる考え方を確認しておかないならないと思います。そのベースが間違っていれば、基本方針や計画もおかしいという話にしかならないわけです。

菊地委員：それについては、義務教育学校制度など、その後の状況の変化もあるので、そういう観点も踏まえて、再検証ということなのだと思います。

大場副課長：情勢の変化については、今後情報提供させていただき、議論はしていただきたいと思っ

ています。

佐藤副会長：小規模校の方が、メリットがあるというわけではなく、どういうことで今の状況がベストだとお考えなのですか。

菊地委員：ベストとは思わないですが、学級数を決めて、その後の結論が一緒にくっついていくという考え方があまりにも急激過ぎるんじゃないかと。

佐藤副会長：子どもたちのことを考えて、小規模校がいいとおっしゃっているわけではないのですか。

松本委員：そこが重要なんだと思いますが。

佐藤副会長：そうです。私たちの保護者の立場から言うとそこが重要だと思っているのです。私も、歴史的な経緯のことは分かりませんが、今の子どもたちの未来を考えてどういう環境がいいのかということだと思っています。

菊地委員：それは理想で、そこから方向性が決まっていいいのでしょうか。

金子委員：子どもたちのことを考えて、どうあるべきかという理想を考えるのではないのでしょうか。

菊地委員：人数の問題なんだとすれば、和戸地区であっても区画整理事業を実施すれば人数は増えます。

濱本会長：それは、教育の問題とは違いますし、ここで議論するのは難しいと思います。

菊地委員：8年、10年後のそういう動きなんかも考えていく必要があるのではないのでしょうか。

金子委員：そういう不確定要素は、今回の検証に入れるのは難しいのではないのでしょうか。

濱本会長：基本的には、皆さんの意見を聞くと、12～18学級という考え方で行こうという点は確認できたと思います。今後は、それを踏まえて、次のテーマについて議論していく、という形でもいいですか。

(異議なしの声)

菊地委員：私は問題があると思っています。

濱本会長：それについては、そのときまた意見ををお願いします。

金子委員：ここでは、ベースとして、答申にあった12～18学級で合意したということでもいいですか。

菊地委員：私は、それについては留保したいと思います。

鶴見委員：それなら、別に全員一致でなくても構わないんじゃないのでしょうか。

濱本会長：それでは、適正規模としては、12～18学級ということで次の話を進めていくということでもいいですか。

全体：はい。

濱本会長：では事務局をお願いします。

大場副課長：長時間に渡る議論ありがとうございました。それぞれ様々な思いがあるとは思いますが、ベースとなる考え方として適正規模が12～18学級という点では基本的には合意できたということで、次の議論を進めていきたいと思っています。

次回の日程調整を今後進めさせていただきます。

濱本会長：それでは、本日はこれで閉会します。ありがとうございました。